

2. 妊 娠 期

目標：生まれてくる赤ちゃんのため、両親が自分の歯と口の健康を守る

妊娠中はつわり等で歯みがきが不十分になるとともに、食事が不規則になるなど、むし歯になりやすく、また、女性ホルモンの影響で妊娠性歯肉炎になりやすい。さらに、妊婦に重度の歯周病があると、早産や低体重児出産につながる危険性がある。

乳歯は胎児期に作られるため、妊娠期のバランスのよい食生活が必要。

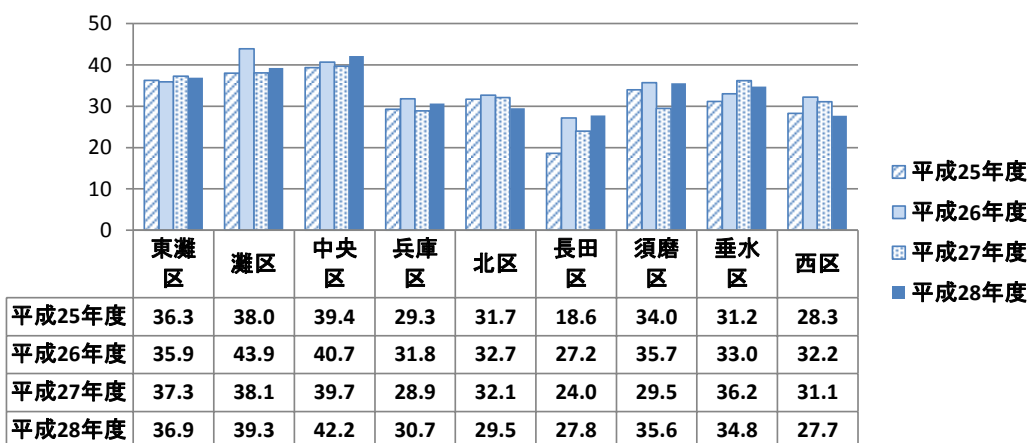
赤ちゃんの口の中のむし歯菌は、出産後に周囲の大人から、だ液を介して感染するため、特に両親が自分の歯と口の健康を守ることが重要。

現 状

妊婦歯科健診

平成28年度妊婦歯科健診受診者 4,276人 / 12,530人（受診率 34.1%）

(%) 妊婦歯科健診の別受診率



別受診率：歯科医療機関の所在区別/居住区別母子健康手帳交付数

神戸市保健事業概要

	平成24年度	平成28年度	動向
進行した歯周炎を有する人の割合	38.1%	38.7%	

課 題

- ・妊婦歯科健診の受診率の向上
- ・進行した歯周炎を有する妊婦の割合が悪化している

推進方策

歯や口の健康は、こどもの心身の健全な育成に大きな影響を及ぼすため、妊娠期から歯科保健に関する情報提供を行い、こどもの健全な口腔機能の育成に努める。

市民の取り組み

- 妊娠したら安定期（16～20 週頃）に妊婦歯科健診を受け自分の口の状態を知り、予防について理解して実践する
- 治療が必要な場合、安定期（16～27 週）にすませる
- こどもの歯と口の健康のため、妊娠中の歯と口の健康が大切だと理解する

関係機関の取り組み

- 産婦人科での妊婦健診等の機会をとらえ、歯科健診の必要性を啓発する
- 企業等は、妊婦歯科健診を受けやすい体制作りをする
- 歯科医師は、妊婦歯科健診の診査内容の説明や歯科保健指導を充実させる
- 妊婦歯科健診をきっかけとして、かかりつけ歯科医を持つことを推進する

行政の取り組み

- 妊娠期からの歯と口の健康づくりに関する情報を発信する
- 妊婦歯科健診（個別健診）を引き続き実施する
- 母子健康手帳交付時に妊婦歯科健診の受診勧奨を強化する
- 妊婦歯科健診の必要性について、医療機関や企業等と連携して啓発する
- むし歯菌の感染を予防する対策について、妊娠期より保護者へ啓発する
- 喫煙の影響などについて啓発する



むし歯菌は赤ちゃんにうつる？

歯がはえる前の赤ちゃんの口の中には、むし歯菌（ミュータンス菌など）は存在しません。しかし、むし歯菌は、赤ちゃんの周囲の人（両親など）から、だ液を介して赤ちゃんの口の中にうつり、歯がはえると間もなく、むし歯菌は口の中に住みつき増殖していく。

◆両親とも自分の口の中のむし歯菌を減らすことが大切。赤ちゃん誕生までに、むし歯の治療を終え、口の清潔を心がけよう。

◆赤ちゃんへ口移しで食事を与えたり、大人の使っている箸やスプーンで与えることはやめよう。

3. 乳幼児期（0～5歳）

目標：こどもの歯を守り、かむ・話すなど口の機能を育てる

乳幼児期は、顎や口の成長にあわせて、食べる機能を獲得するとともに、味覚形成の重要な時期。歯や口の健康が、こどもの心身の健全な育成に影響を及ぼすため、規則正しい食生活、フッ化物の利用によるむし歯予防対策の充実を図る必要がある。

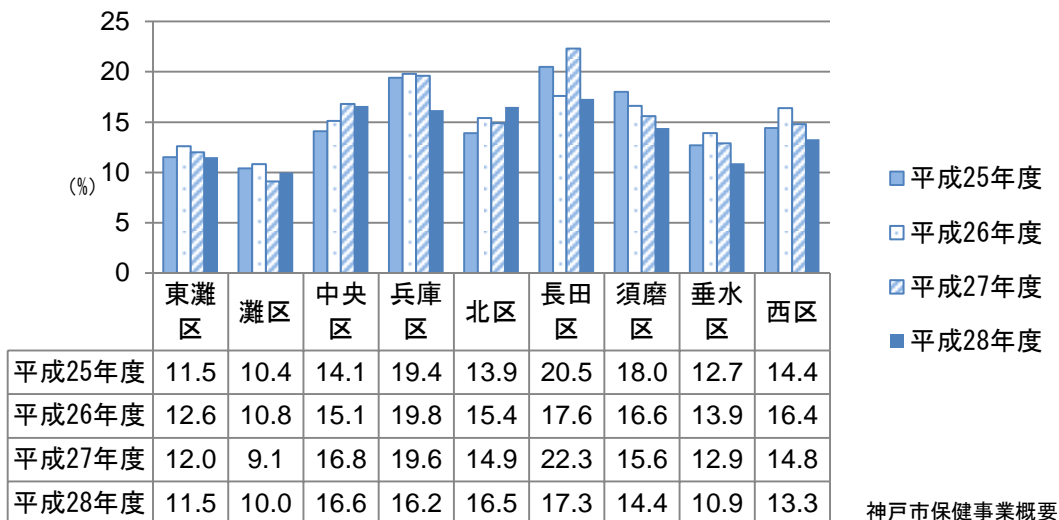
（1）家庭、地域における取り組み

現 状

- ・むし歯は減少傾向だが、地域差・個人差がある

		平成24年度	平成28年度	動向
3歳児	むし歯のない者の割合	84.3%	86.5%	
	有病児1人平均むし歯数	3.60本	3.34本	
	不正咬合等が認められる者の割合	22.6%	23.5%	

区別にみたむし歯をもつ児の割合
(3歳児歯科健診結果)



課 題

- ・3歳児でむし歯を持つ児の割合は、地域により10%から17.3%まで約1.7倍の差があり、地域格差が顕著である
- ・一人で多くのむし歯を持つ児への対策が課題
- ・3歳児での不正咬合はやや増加している

推進方策

歯科保健に関する情報提供を行い、歯科疾患の予防と健全な口腔機能の獲得に努める。むし歯予防のためには、規則正しい食生活、歯質を強化するフッ化物を利用する必要があることを啓発する。あわせて、周囲の大人からのむし歯菌の感染防止についても啓発する。

市民の取り組み

- 歯科健診を通して、こどもの歯と口の現状や、むし歯のリスクを把握する
- 歯科保健指導や健康教育を受け、歯と口の健康のための知識を得て実践する
- 歯ごたえのある食事の必要性を理解し、よくかんで食べる習慣を身につける
- 食事の形態は口の機能の発育に応じて、ゆっくり段階的に進めていく
- 歯みがきや保護者による仕上げみがきを習慣づける
- 砂糖の少ないおやつを選び、時間を決めて食べる
- むし歯予防のためフッ化物洗口・塗布を利用する

関係機関の取り組み

- 地域の子育て活動等の機会を活用し、歯と口の健康に関する情報提供をする
- 歯科医師等は、定期的な受診を勧奨し、フッ化物塗布等の予防処置を促す
- 口腔機能の発達などについて理解し、保護者へ説明する
- 歯科健診時には虐待等も考慮し、必要な場合は適切に対応する
- 養育上支援を必要とする家庭を把握した場合、「養育支援ネット※」を活用して保健機関（各区役所・支所のこども保健係）との連携を図る

行政の取り組み

- 歯科健診、および歯科健康教育を実施して、むし歯予防や口腔機能の健全な発達を促す
- 乳幼児健診での歯科保健指導内容の充実を図り、健康を育むための歯と口の健康づくりをすすめる
- う蝕活動性試験の結果、むし歯になる可能性が高い「ハイリスク」判定児への歯科保健指導を実施して、むし歯の発生および重症化を防ぐ
- フッ化物塗布、歯みがき剤などフッ化物利用の継続の必要性について啓発する
- 歯ブラシによる喉突き事故の防止について啓発する
- 健診結果等を分析して、市民へわかりやすく情報発信する
- 重点地域を選定し、地域の特性に応じたハイリスク者対策をする
- 口の機能は段階的に成長していくため、食事の形態はそれに依りてすすめていくよう啓発する

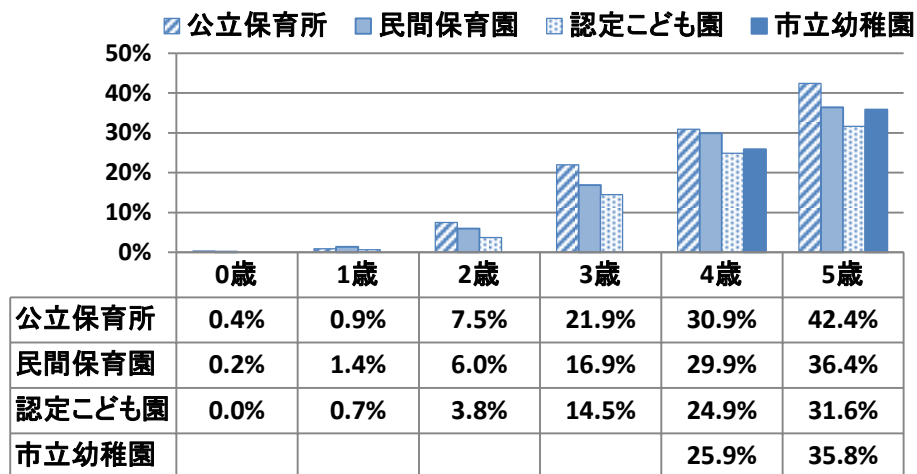
※養育支援ネット：医療機関と保健機関の連携を推進するために兵庫県下の市町で実施している情報提供システム

(2) 保育所（園）、幼稚園、認定こども園における取り組み

現 状

- 保育所（園）、幼稚園、認定こども園では、歯科健診結果を実施するとともに、必要な場合は、受診勧奨を行う（平成 28 年度受診者数：公立保育所 5,303 人、民間保育園 8,598 人、認定こども園 8,747 人、市立幼稚園 2,217 人）

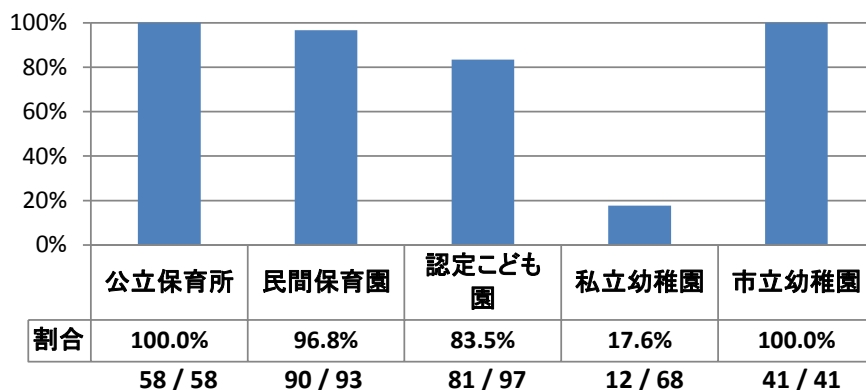
施設別のむし歯を持つ児の割合



神戸市こども家庭局、神戸市教育委員会 調査

- 保育所（園）、幼稚園、認定こども園に通っている 4 歳、5 歳児クラスの希望者を対象に、フッ化物洗口を実施 平成 28 年度の実施率は 79.0%（282 / 357）

施設別のフッ化物洗口実施割合（平成28年度）



神戸市こども家庭局・神戸市教育委員会 調査

課 題

- 歯科健診実施後の受診勧奨などの充実
- 保護者に対する健康教育の充実
- 私立幼稚園などのフッ化物洗口の実施率の向上

推進方策

歯科健診、歯科健康教育を引き続き実施していく。また、フッ化物洗口の未実施の園については、神戸市歯科医師会の協力のもと、フッ化物の有効性・安全性について、幼稚園や保護者の理解を得ながら、拡大していく。

市民の取り組み

- ・保護者は、保育所（園）・幼稚園・認定こども園の歯科保健の取り組みに関心を持ち、積極的に参加する
- ・保護者はフッ化物洗口の有効性・安全性について理解し、こどもに受けさせる

関係機関の取り組み

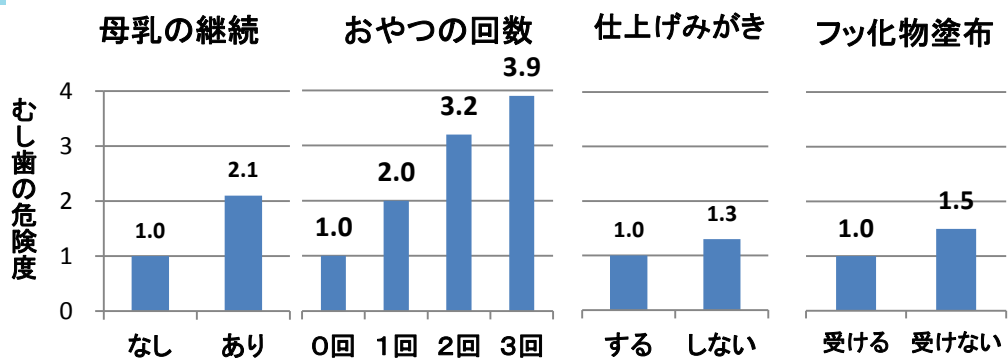
- ・こどものかむ力や口腔機能の発達に関する情報を発信する
- ・歯ごたえがある食材・献立の導入を充実する
- ・こどもの歯と口の健康に関して保護者へ情報提供する
- ・フッ化物に対する正しい知識を持ち、むし歯予防対策として普及・啓発する
- ・歯科健診、健康教育、フッ化物洗口の実施について充実を図る
- ・フッ化物洗口の実施率の向上を図るために、行政と連携する

行政の取り組み

- ・保育所（園）・幼稚園・認定こども園では、年に1～2回、歯科健診を実施するとともに、健診結果を保護者に知らせ、治療が必要な場合は歯科診療所への受診をすすめる
- ・歯の健康サポーター（歯科衛生士）などによる健康教育を実施して、こどもに歯やかむことの大切さを伝え、自分で歯と口の健康を守る習慣を身につけさせる
- ・フッ化物洗口について園の理解が得られるよう啓発して、実施する園を拡大する
- ・保護者を対象とした「食育ひろば」では、資料をもとに「噛ミング30（カミングサンマル）」を含めた食育実践について啓発する



生活習慣とむし歯の関係（神戸市幼児歯科健診結果より）



多変量解析：性別、出生順位、国籍、就寝時間を調整

1歳6か月における生活習慣が3歳児歯科健診でのむし歯の有無に与える影響について調査した結果、母乳の継続、おやつの回数が多い、毎日ジュースを飲む、仕上げみがきをしない、フッ化物塗布を受けないなどの場合、むし歯の危険度が高いことがわかった。

The Influence of Lifestyle on the Incidence of Dental Caries among 3-Year-Old Japanese Children.
International Journal of Environmental Research and Public Health, 2014. 11

4. 学齢期（6～17歳）

目標：むし歯を予防し、歯と口の健康づくりの基礎をつくる

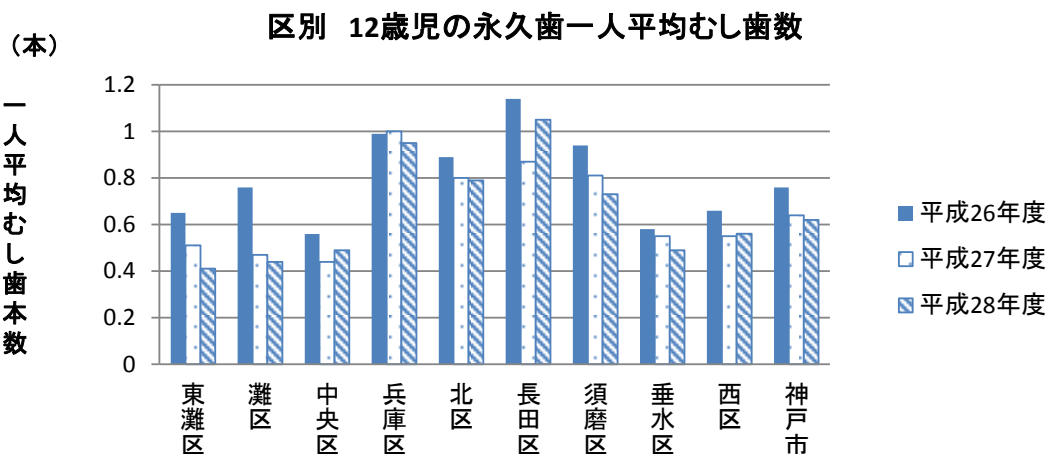
生涯を通じた歯と口の健康づくりの基盤を形成するため、重要な時期である。顎の成長が著しく、乳歯から永久歯にはえかわり、14歳頃に永久歯の歯並びが完成するという、自分自身の成長発育を実感できる時期。生え変わりの時期はかみづらく、汚れも残りやすいため、むし歯や思春期性歯肉炎に注意が必要である。「自分の歯と口の健康は自分で守る」意識を持ち、実践する態度の育成が求められ、学校保健教育を充実する等、予防に重点をおいて取り組む必要がある。

現状

歯科健診結果

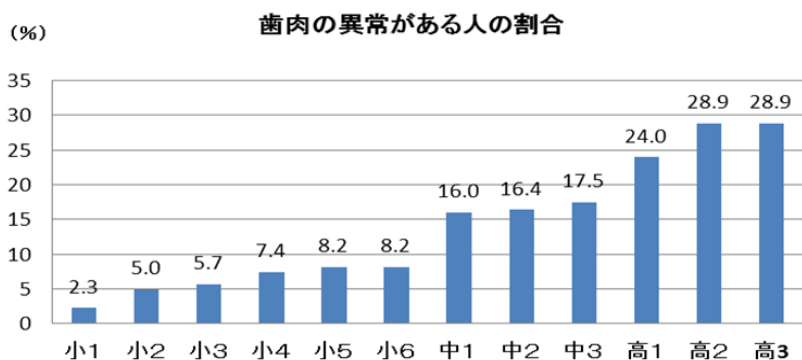
- 12歳児にむし歯を持つ人の割合と一人平均むし歯数は、年々減少しているが、地域格差がある

		平成24年度	平成28年度	動向
1人平均むし歯数	12歳児	0.83本	0.62本	



神戸市教育委員会調査

- 年齢が上がると、歯肉の異常のある人の割合が増加している



平成28年度 神戸市学校保健統計

課題

- ・ 歯科健診実施後の受診勧奨の充実
- ・ むし歯の地域格差が顕著である
- ・ 中学生・高校生において歯肉に異常がある人の割合の増加が課題
- ・ 歯と口の健康づくりを通して、かむことの大切さを啓発し食育を推進することが課題

推進方策

生涯における歯と口の健康づくりを考えるため、むし歯や歯周病の予防とともに、食育の視点も踏まえ、歯科口腔保健活動を行う。歯科健診や歯科健康教育および学校保健委員会などを活用して、心身ともに健康な児童生徒を育成する。

学校だけでなく家庭での取り組みも重要であり、保健だよりや学校給食だよりなどを通して、児童生徒や保護者へ啓発する。

市民の取り組み

- ・ 学校での歯科健診結果にて要治療と指摘されたら、早急に受診する
- ・ むし歯予防のためにフッ化物を利用する
- ・ 歯肉炎の予防のために正しい歯みがき習慣をつける
- ・ 保護者は、こどもの歯と口の状態を把握し、適切な食生活、仕上げみがきなどを行う
- ・ かかりつけ歯科医を定期的に受診する
- ・ こどものはえかわり時期のかみ合わせに注意する
- ・ しっかりかむことを意識する

関係機関の取り組み

- ・ 児童生徒や保護者に対して、歯と口の健康づくりに関する情報提供をする
- ・ 学校歯科健診結果を基に受診勧奨をする
- ・ 学校歯科医や外部の専門家、教職員による歯科健康教育を充実させる
- ・ 学校において、むし歯や歯肉炎の原因やその予防に関する健康教育を充実させる
- ・ 歯科医師等は、治療のみならず予防の意識を持つための働きかけを行う
- ・ 給食の献立に、かむことを意識したメニューを取り入れる
- ・ 食後の歯みがきを習慣づけるよう、取り組みをすすめる
- ・ 歯や顎を外傷から守るため、スポーツの時のマウスガードの使用をすすめる

行政の取り組み

- ・ 学校等と連携して、歯と口の健康教育を推進する
- ・ 関係機関と連携し、保護者に対して歯と口の健康づくりについて（フッ化物利用も含めて）啓発する
- ・ 学校でのフッ化物洗口の実施について調査・検討する
- ・ よい歯の表彰、歯・口の健康に関する図画ポスターコンクールなどを実施する
- ・ たばこが歯や歯肉に及ぼす影響について周知する